

「世界の中の日本」―そしてもう一度原子力

大きな犠牲を払い、何を学んだのか

3. 11から2年3ヶ月経ってもまだ、重い空気に包まれたままの今の日本。原発再稼働が焦眉の急を要する課題となる中、これからどう変わらなくてはいいけないのか。

北岡伸一(元国連日本代表部次席大使・国際大学学長)
黒川 清(元国事故調査委員会委員長・政策研究大学院大学教授)

◆弱さを自覚してこそ強くなる

―福島事故以降、中韓との領土問題にみられるように日本が弱体化しているように思えますが、現状についてのご意見からお聞きします。

北岡 政治的な観察で言いますと、福島原発事故を契機に弱ってきたというよりも、弱ってきていたことが事故で「バレた」のだと思います。高度成長期の55年体制はある程度は上手くいく制度でした。成績で言うとBプラスくらいですかね。経済成長をするから税の自然増があった、それをいろんな事業に回せますし、また野党がだらしなので与党自民党は安泰です。そうなる後は、官僚と連携してやっていたら上手く出来たわけです。ところがその流れが止まって、さあス

クラブ&ビルドをやらなくてはいいないぞという時、日本はこれから何を主眼に置いて、どんな戦略で行けばいいか、頭では分かっているかもしれないけれど、実際に行動にすることが出来ないのです。その上、霞ヶ関の役所がお互いに突っ張っているから、コンセンサスも得られない。90年代になってから、何度となく官邸機能強化を図っているのは、中枢を強くする必要があります。それが分かっていないからですが、実際にはそれが出来ていない。その根っこには、組織のあり方とか、個人の責任に対する考え方が、今の時代が求めることに対して合致していないからだと思います。組織も個人もどんどん劣化してきて、それが著しい格好で表面化してしまっただけが福島原発事故です。

黒川 わたしも基本的には同じ認識で

す。個人のそれぞれの得意性を適材・適所として集まって組織も、そして国家も形成されます。また国全体としての、それぞれ特有の文化的、伝統的な強さといったものがある。「日本の強さは、ものづくりです」と言うけれど、その通りでしょう。軽くて、綺麗で、精巧なもののをつくることには長けている。例えばカメラのレンズを一生懸命にこすっているだけでマイクロナの歪みが分かっているという「匠の技」です。日本人はそういう「よりよく」する、深く突っ込むことが得意で、言われなくてもやる。ODAを見ていても現場で一生懸命にやっています。それが日本人の強さです。その、ものづくりと科学・技術に関して定評のある日本で、福島原発のような事故が起きたから世界が仰天したわけであ

り、イタリアやスイス、ドイツなどは「日本で事故が起きるなら、わたしたちには無理だ」といって原発を止めてしまったくらいです。それほどのインパクトがあった事故なのです。

日本の強さはそういうことですが、では「弱さ」は何でしょう。「弱さ」を認識していない限り、グローバルな世界では通用しませんが、残念なことに弱さを認識している人が少ない。これが個人のレベルならば構いませんけど、国や官庁や企業などの組織という話になると、すごく拙いわけです。弱さを認識していないと、退け時を誤ることは、太平洋戦争における日本陸軍を見れば明らかでしょう。あの戦争を始めた時も最初から「一年くらいは何とかもつだろうが、そこから先は無理だから止めたほうがいい

い」ということはみんなが分かっていたこと。それを「責任ある人達」が無視して、出口戦略を持たないまま始めた。例えば、軍人ではなくて役人ですが、弱さを認識していなかったのです。弱さに対して無自覚であるということは今でも変わっていません。だから世界から見ると「日本は実に理解し難い不思議な国だ」

ということになるのです。

北岡 「軍国主義」とは一般的に、「軍事的な価値が優先されている社会」と定義されますが、当時の日本は軍国主義ですらありませんでした。軍隊に強烈なリーダーがいて戦争に引張って行ったのではなくて、黒川先生がおっしゃるように「止めたほうがいい」と分かっている戦争を止められず、

てしまった。まず北側が圧倒し、次いで国連軍投入で押し返す。その一年前に中国で国民党と共産党の内戦が終わっていましたから、中国が30万人の兵隊を押し込むなどして、休戦まで3年間続きました。この状況に対して、アメリカが危機感を抱き、日本を共産主義からの防波堤にしようと考えたのも無理はない。だから経済的に独立させる必要があったのです。

しかも陸軍も海軍も、相手に譲るくらいなら戦争をしたほうがいい、ということと突き進んで行っただけの話です。ですから中国大陸から撤兵しなければ日米戦争が避けられないという時、陸軍は「撤兵は99年後ならば考える」などと、ふざけたことを言うわけです。

それでも何を持って身を立たせるか。それが繊維、鉄、船舶、自動車、家電であり、日本の強さである「ものづくり」だったということでしょう。それらは西洋で生まれたものであって、その改良、低コスト化をはかって経済的成功を収めた。日本のオリジナルではない。身も蓋もない言い方をすると、これまでの日本は「ものをつくる」という開発途上国型の成長モデルには適していたものの、自分たちのオリジナルを世界のドメインに広げることが不得手だし、やってこなかったのだと思います。

数年前からも「ものづくり国家を目指す」と盛んに言われていますが、わたしは違うと思っています。「ものづくりは大切だが、ものを語れる、その一部にものづくりがある国を目指すべきだ」と提唱しています。心の芯に大きなことがあるから、もの語りを語れるのであって、ものづくりはその一部に過ぎません。

黒川 戦後、日本が高度成長を成し遂げたのは歴史的背景があつて、それは日本人の特性が活かせるような時代環境だったからです。戦争が終わって冷戦構造が始まりますが、衝突する地域は地政学的に東ヨーロッパと東アジアという火薬庫であつて、そこにたまたま日本が位置していた。そして隣の朝鮮半島で悲劇的なことですが、同じ民族が北と南に分かれて戦争になっ

それは何を持って身を立たせるか。それが繊維、鉄、船舶、自動車、家電であり、日本の強さである「ものづくり」だったということでしょう。それらは西洋で生まれたものであって、その改良、低コスト化をはかって経済的成功を収めた。日本のオリジナルではない。身も蓋もない言い方をすると、これまでの日本は「ものをつくる」という開発途上国型の成長モデルには適していたものの、自分たちのオリジナルを世界のドメインに広げることが不得手だし、やってこなかったのだと思います。

数年前からも「ものづくり国家を目指す」と盛んに言われていますが、わたしは違うと思っています。「ものづくりは大切だが、ものを語れる、その一部にものづくりがある国を目指すべきだ」と提唱しています。心の芯に大きなことがあるから、もの語りを語れるのであって、ものづくりはその一部に過ぎません。



▶ 黒川先生（右）と北岡先生

対談

「世界の中の日本」——そしてもう一度原子力

（大きな犠牲を払い、何を学んだのか）……2

北岡伸一（元国連日本代表部次席大使・国際大学学長）

黒川 清（元国会事故調査委員会委員長・政策研究大学院大学教授）

社会的重圧に左右されることなく県民の安全のために科学的議論をする……11

鈴木賢治（新潟県技術委員会元座長／新潟大学教育学部長）

エネルギーと私

「21世紀は警告する」取材後記

（悩みの始まり）……18

吉成真由美（NHKスペシャル番組ディレクター）

シールガスでエネルギー安全保障問題は解決出来るのか？……23

高レベル放射性廃棄物の「文献調査」に応募した者として……24

（今、一考する）

田嶋裕起（高知県元東洋町長）

原子力発電と活断層……28

（松田・入倉対談を読んで）

石田瑞穂（海洋研究開発機構特任上級研究員）

原子力のいま——立地地域の声を聞く

敦賀半島ともんじゅと暮らして87年……16

橋本昭三（元敦賀市議会議長・郷土史家）

原発停止中という不条理……32

中村敏彦（愛媛県伊方町議原子力発電対策特別委員長）

聞く耳を持つ事、話し合うことが何よりも大事……36

伊澤史朗（福島県双葉町長）

表紙「モンマルトル」・池波正太郎画

北岡 「寄せ集めていく能力」はこの国にでもあるものではなくて、これは日本の相当な強みだと思います。でもフィロソフィを持たないから、ブレイクスルーが起きないのです。大きな枠組みの中で、言葉は不適切かもしれませんが、下請け的な仕事をしているうちはよいのですが、そこから先の大きなものが生まれてきません。

1936年8月に定められた「国策ノ基準」には、満州国の健全なる発展、日満国防の安固、ソ連の脅威の除去、英米に対する備え、日滿支の緊密なる提携、我が国の経済的発達、列国との友好関係に留意、などが列挙されています。一つでも難しいことが、しかも相互に矛盾する政策が、ただ羅列してあるのです。それが日本全体の国益にとって合理的なのか、実現出来ることなのか、厳しくチェックしないで、それぞれの役所の合理性、建て前の上でしか検討をしていないから、こういうことになるのです。

場合によっては、肉を切らせて骨を断つくらいのことをしないと、この世界の中では生きていけないのですが、それがおそろしく下手です。大学もそうだし、あらゆる組織でスクラップが出来ません。だからどこでも「予算は毎年一律3%減」なんてことをやっているのです。

企業はまだ成長のために非採算部門を切り捨てて、その予算と人を採算部門

に回すなどして利潤を追求しますが、政府には利潤という明確な基準がありません。だからスクラップ&ビルドもやらないままでいる。そして世界に大きな変化があった時、上手く行かなかったということで済んでしまうのです。

◆これからの日本に必要なこと

——中国に抜かれたとはいえ、世界第三位の経済大国である日本はこれからどうしたらよいのですか。

黒川 東西冷戦の終結した1991年はWWWが出てきたインターネット接続元年とも言っていますが、世界では93、94年にかけてAmazonとかYahooなど、これまでなかった新しいビジネスモデルが数多く生まれています。この間に日本から何か生まれましただか？ 残念ながらなかったように思う。何故生まれなかったのかというと、言わば「成功体験」「イノベーションのジレンマ」というか、世界と伍して新しいことで競争しなくても、市場からレッドカードを突き付けられても、政府が公的資金を入れて援助や救済してくれるからです。ダメなところは潰さなくては成長しないと、それをハッキリと繰り返し発言している経済学者として星岳雄さん（スタンフォード大学教授）などがいますが、彼は「日本経

済が成長しないのは当然だ。公的資金で救済されたゾンビ企業が多いからだ」と言っています。企業も学者も官僚も、それから政治家ももっとグローバル世界の中で「個人」という資格で採まれる必要があると思います。そういう実体験がない限り、いくら頭で理解したつもりでいても分らないと思う。

北岡 冷戦状態であると、米ソ間の衝突はもちろん、仲間の国が危険を冒すことも抑えますから、ある種、安定した体制だったとも言えます。だから、その中にいれば、まあまあ大丈夫でした。そして日本は伝統的に、大戦略の得意な国が絶頂期である時に組んでいると上手いく。明治の日英同盟、戦後の日米同盟がまさにそうです。しかし、これからは日本も大きな試練を迎えると思います。アメリカともヨーロッパとも、さらにはアフリカとも組むのは良いけれど、その時にどういう基軸でやるのか。それさえハッキリしていれば、世界中の理解は得られると思います。

黒川 島国で海に囲まれていて、資源がない点は日本もイギリスも同じです。しかも両国とも大きな大陸のすぐ横にある。何が大きく違うかというと、日本が基軸を細部へ求めるのに対して、イギリスは長い世界の歴史、広い地球を眺めて大きな図柄を描こうとする点です。特に

将来エリートになるような人達は若い時から、自分からどんな外へ出る。いま流行りの「ギャップイヤー」などですね。すると世界の広さばかりでなく、自分を、自分の国をもっと大きな、世界からの視点で見る感性、直感力が育つ。端的に言えば、イギリスは「デモクラシー」とか「ファイナンス」とか見えないものに価値をつくるのが上手いけれど、日本はそういうものに対して価値がつけられない。ものが見えるとか、手で触ってみないと価値が分からない。その証拠に商談では必ず「サンプルを見せてくれ」と言うでしょう。

それから、この先に世界でどういうことが起こるか、いま起こっているから次はどんなことが、という視点で、つまり相手の立場で自分の国のことを直感的に「個人」として見ることが出来る。こういう視点を「個人」の立場から見れる日本人がほとんどいませんね。

北岡 特に、役人には既定のラインからはみ出して発言する人はいません。日本の役人でも優秀な人はいるのですよ。今度TPPの交渉官になる鶴岡外務審議官などはタフネゴシエーターとして結構やるのではないかと思います。わたしは冗談で、「君がまだ生き残って、出世しているのだから、外務省も懐が深いね」と言っています。



▲世界が注目している福島原発事故のその後。IAEAによる福島第一原発の視察の様子

ある時、公務員研修で、「きみたちがこれから外国でパフォーマンスをするためには、日本にいる時のようなことをやっていたらダメだ。逆に外国でやっていることを日本で行ったら、たちまち弾き飛ばされる。二重人格にならなくてはいけない」と話した人がいましたが、それは確かに正しい。

国連安保理での議論でも結局、財務省の了解をとったこと以外は発言するなどと言わ

れるのです。ですから、一回目は言われた通りに言うのですよ。でも議論ですから発展するので、相手がこう出たら、こうするというのをやらなければ、外交なんて出来ません。だからその後は指示を無視してしゃべっていました。しかし、それは役所の論理から言うところ「問題あり」ということです。

国連では、安保理で活躍するための条件の一つは、その国のトップ

である大統領や総理大臣と何時でも話が出来ることだと言われています。そんなことは世界では当たり前ですが、日本の場合、話せるトップはせいぜい外務次官までです。外務大臣とだって自由に話せない。ましてや総理大臣は無理です。そんなことで自由に、臨機応変な措置が出来るはずがない。

◆世界に福島事故の説明を

——さて今後、福島事故を日本はどう活かしていくべきだと思われませんか。

黒川 原発はいま世界で約440基あります。そして

建設中が約70基、計画中が300基はあるでしょう。これに対して、メーカーはアレバ―三菱重工、東芝―ウエスティングハウス、日立―GE、ロシア、中国、韓国などです。つまり、日本企業が参加してくれなくてはと世界が思っています。

仮にいまどこの国で、福島と似たような事故が起きたとすると、当然「日本は福島事故の後どうしたのか」ということになります。しかし、2年3ヶ月経つてもまだ、ハッキリとした情報が出てこない。何をしているんだ、と思われています。こんなことで日本の国家としての信頼はどうなるのですか。再稼働や原発の売り込みに対して世界は厳しい見方をしています。あれだけのことが起きているのだから、全てを公開して、世界の最高の知見を集めて将来にわたって世界と共有する、ということが大事なんです。これから世界で300基もつくる計画があるのなら、日本は福島事故を契機にこう変わった、二度と同じような事故は世界で起きて欲しくない、ということ

を伝えるプロセスと意志を示さなくてはならない。

そして、その信頼は「透明性」と「世界に開かれたプロセス」、それに基づいた情報をコンスタントに、相手に分かり易く、英語をはじめとする公用語など、いろいろな手段で発信することでしか信頼は得られません。みなさん口では「そ

うすることが必要だ」と言うけれど、やりません。必要だと言っていて、やらないのは政府も電力会社も内向きの理由でしか頭が働かないからです。何かが起きた時に、こういう責任の取り方をするかということの覚悟があるかということですね。それをわたしは国会事故調でも繰り返して言いました。福島事故で見たのは、現場は強いが、上に行くほど「ダメ」になるということです。日本は良いモノをつくるけれど、組織統治が駄目です。

北岡 福島原発事故は日本の「由（よ）らしむべし、知らしむべからず」の政治の失敗であり、国際化への対応の著しい欠如によって起きた。詰まるところ事故原因は、この二点に帰着すると思います。冷戦時代＝自民党時代は、政府が「これで万全です。お上を信じなさい。間違いありません。あなたたちは詳しいことを知らなくてもいい」と言っていました。それはやはりウソでした。2010年に核セキュリティサミットが開かれ、そこで「日本はテロリズムに対する防護が不十分だ」という警告を受けています。ところが「日本ではテロは起こらない」といつて無視をしました。そして福島原発事故が起きています。権力が集中していれば、腐敗が生まれます。黒川先生のおっしゃる通りです。

日本の一番の弱点は昔も今も「資源」

です。太平洋戦争の時も、大陸と南方から資源を積んだ船をどうやって持つてくるかが至上命題だった。敵は日本の弱いところを突きますから、潜水艦を強化して輸送船を沈めるわけです。日本は潜水艦による輸送船への攻撃に対しては駆逐艦や護衛艦をたくさん作って対応すべきだったのですが、大艦巨砲主義にこだわった。巨大な戦艦をつくって、向こうが正々堂々と正面決戦してくれば勝てるかもしれないということをやり、潜水艦を沈めていくということをやらなかった。でも向こうは、勝てる確率が5分か6分ならば、艦隊決戦は避けて、輸送船を沈めて来ます。大艦巨砲主義にこだわったか理由の一つは、護衛艦や駆逐艦は小さいということです。小さい船の艦長になっても出世できないのです。出世できないと給与も上がらないし、退職金も恩給も少ないのです。ともかく大きな船に乗りたいたいです。

それから日本にはゼロ戦がありました。部分的に優れています。だけど向こうは、ゼロ戦は優れているから複数の飛行機で対応しようとしたら、もう太刀打ちできないのです。スピードを出すために防御力を削り取っていますから。だったらゼロ戦を陸軍でも使えばいいじゃないかと思うけれど、これは使い方が違うから

と言って、別の飛行機をつくるのです。本当に小さな失敗に満ち満ちています。

黒川 多くの議論や会議でも細部の議論に入って、すぐに各論になってしまい、総論は何だったのか、何のためにやっているのかを忘れてしまう傾向があります。知識ではなくて、そこから吸い取ってくる生きる智慧が大事だと言っているのに、大きな目的は何なのかを忘れて、縦に分けようとする。それが失敗の根源にあるように思います。

北岡 わたしも総合資源エネルギー調査会基本問題委員会（三村委員長）の委員をやっていましたけれど、委員はこれまでと同じ推進路線の人と、原理的反対路線の人が多くて、合理的にどれだけの確率でどうかという議論をする人は、ほんの少数でした。そういうところでは対話が成り立たないのです。このままで良いと言ってほとんど反省がない人と、絶対に反対だと言う人が4割ずつ。これでは議論になりません。役人も議論にならないことは、最初から分かっていたながら、「世論が厳しいから、反対派も入れておこう」と媚びているのです。徹底的に議論をして合理的な結論を出しましょうというマインドではない。

黒川先生は国会事故調報告書で、文化の問題であると指摘されて、世間から批判され、外国人もアレギー反応を起こ

しました。しかし、この指摘はまったく正しいと思います。ある組織の中で快適に生きていくためには、どうしなくてはいけないかという行動規範が、いまの時代にまるで適していないのです。

ですが、わたしは日本人がずっとそうだったとは思いません。例えば、戦国時代の武将も幕末や明治時代前期のリーダーも、それでは生きていけませんから、それなりに考えて行動しました。世界が大混乱になった時には、そういう人が出てくるのです。それをグループで、事なかれ主義でやっているから、劣化してきたということではありませんか。詰まるどころ、個人の責任を追及しない。個人の能力を問いつめない。そこが一番の問題だと思います。

◆信頼を失った学者は国際化で補え

——福島事故によって学者への信頼が失墜したことも大きな問題だと思っていますが、どうしたらいいとお考えでしょうか。

北岡 簡単なことです。どうしてそこに国際化のエレメンツを入れないのですか。外国の専門家をどんどん入れてやればいいだけではないですか。日本人だけで、日本の中で原子力ムラをつくっているから、信用されないのです。

電力事業の独占体制は、日中戦争の時にもやりましたが、効率は上がらなかった。独占して良いことなんて、基本的にあるわけがない。わたしは、行き過ぎれば弊害もあるけれど、競争がないところは本当にダメだと思います。

黒川 イギリスで、「国会事故調は日本の憲政史上初の独立委員会である」と言ったら、「初めて？ 信じられない」と言っておきられました。欧米ではそういう認識です。向こうは毎年2、3本政府の大きな課題は「独立委員会」で扱うし、提案をもらうのです。そして政府の失策については厳しく追及されます。だけど、日本で国会事故調の報告を出しても、みんな平気な顔をしている。報告書にはファクトだけ書いてあり、個人的な意見は出されるだけ削ぎ落しています。それで立法府に7つの提言を出した。委員会は20回全て公開、さらにオンラインでも公開、英語の同時通訳も入れています。報告も日本語と英語。内容が良いかどうかは世界が判断してくれと言っているのです。そういうプロセスがすごく大事なんです。日本は形式を真似するのは上手いけれど、その根本にある精神を学ぶことがない。例えば、イギリスのデモクラシーは歴史が長く、いろいろな試練を経てつくってきました。日本のいまの制度はそのイ



▲国策である原子力の推進に寄与した立地市町村の首長たちは、定期的に集まり活発な議論を行っている

ギリスが手本です。イギリスの国会が始まる時には女王が来て肅々とやりますが、最初に議場には両党の党首が並んで入ってきます。これは何時政権交代をしてもいい、そういう歴史と現実味のある行動をしているのです。いまのデビッド・キャメロンもトニー・ブレアもそうですが、政治家のトップになる人はしばしば40代です。大学時代に始まるそこまでの訓練をしながら、政治家として頭角を現してくる。自分の地元と選挙は関係ありません。

これは日本人の智慧がないところですが、

が、そういう形は真似をするけれど、何故そうなっているのか、国によって歴史が違いますけれど、精神をもっと謙虚に学ぶ必要があります。

北岡 政治の仕組みはいろいろで、議院内閣制と大統領制では違います。やはり議会の一番の機能は、政府がやっていることを「本当にそうですか？」とチェックすることです。ただ日本は党に対する忠誠心が強過ぎて、自分の党に不利なことは言わないのです。特に議院内閣制でその危険がある。議院内閣制は議会の多数派が政権をつくれますから、国会で決める時も独立になりにくいのです。

多くの政治学者が言っていますけれど、議会は国政調査権を持っているのだから、政府が嫌がることを調査して結果を出させ、リーダーの責任を負わせることが出来ます。逆に、野党もいい加減な質問をしたら反論されるというリスクを負わないといけない。日本の国会にはそういうディベートがなく、専守防衛です。与党の大臣は、野党の議員の質問に「あなたの意見こそおかしいじゃないか」と言っているじゃないかになっていくのです。

ところが、これが時々そうではないことが起こります。例えば日

中戦争の最中、斎藤隆夫は厳しい質問をしているのです。「この戦争はどういう条件で何時終わるのか？ 聖戦とは何か？」ということで、国民はこれだけ犠牲を払っているのだから、どういう条件になったら終わるのか、教えてくれと言ったら、「聖戦を冒涇した」として議会で除名されてしまった。そういう勇氣ある人もいます。ちなみに、その時は1時間以上の議論を全部メモなしで、完全に暗記してやっているのです。そういうことをやる人がいて、こういう法律家型の弁論ですが、それが必要です。一般的な「これをどう思うか」とか、そんなことを質問しているようではダメです。

黒川 原子力、エネルギーというのはこの国でも最も大きな問題です。だったらもっと国際的にも国内的にもオープンなディベートが必要であるはずですが、アインシュタインがE=mc²の原則を見つけたのは1905年です。まだ100年くらいしか経っていないけれど、40年経って広島と長崎に落ちたのは何故か。戦争をしていながら、勝つためのすごい投資をするからでしょう。それから60年経って何が起きたのかという話なのです。

そういう意味では、こういう大きなエネルギーを本当に人間が扱えるのかという話が一つと、それから重大事故は起こりませんというけれど、日本が原発を導入した、事故を起こした福島第一原発は1960年代のものでしたから、当時はアメリカの技術のほうで、軍事から来ているのだから日本よりも優れているに決まっています。エンジニアはほとんどが海軍出身者です。そういう背景は無視して日本は民間でやってきました。その間に地震学もどんどん進んでくると、危ないと思った時、どうこれを改善していくのか、「国民のため」という国家になっているのか、誰が責任をとるのかという話で、関係者の議論は終わってしまったのです。何でも日本は始める時はいいのですが、止めていくことが出来ない。これは政治の問題です。

北岡 それから日本には「お上がやることは間違いない」というおかしな建前があります。わたしが国連大使として赴任する時、友人が「大使公邸に美術品を貸しましょう」と言ってくれたことがありました。ところが予算上、その美術品の輸送には保険が掛けられないのです。つまり、お上のすることに間違いはない。事故があるはずがないという、とんでもない哲学で生きているわけです。

また国連の会議に総理大臣や外務大臣が出席する時、ホテルを予約しますが、日程変更でキャンセルになることがあります。

ます。ところが日本政府はキャンセル料を払わないのです。これは現場ですごく困る。キャンセル料を払わずにとれるホテルは本当に限られていて、とれるのは結構割高の親日的なホテルくらいです。

さらに国連本部に大きなダイニングルームがあるのですが、これを間際になって総理大臣がキャンセルしたことがあるのですが、「キャンセル料を払わない」と言って、しばらく立入禁止になったことがあります。日本の中でしか通用しない、お上に間違いはないという、とんでもない哲学で、これほどの国際化時代をやっているはずがない。もっと一流の外国人の力をどんどん借りればいいのです。明治時代はお雇い外国人に総理大臣よりも高い給与を払っていたのですよ。

黒川 お雇い外国人は政府に雇われ、何百人といった。国にとって大事だからですよ。太平洋戦争後の民主主義社会と言いますが、途上国型であり、冷戦と安保の枠組みがあり、経済成長の成功で「エリート」は傲慢になっていやしないか。与えられた義務の任務に対する責任、これが「アカウンタビリティ」の本当の意味ですが、それをとる覚悟に欠けている。誰も責任をとりません。戦前、戦中には責任をとって切腹した人がいます、「つめ腹を切る」のもあったでしょう。今回の

原発事故では世界のエキスパートを招いて透明性を持って行動すべきです。原子力は世界中で関心を持つことから、もっと公開して議論を行うべきです。

◆規制庁はどうしたらいいか

——規制庁が出来て仕事をしています。どういう評価をなさいますか。

黒川 アメリカでTMI事故が起きた時は、ダートマス大学の学長が委員長をつとめた12人の委員による「ケメニリーポート」が出ています。そのレポートも読みましたし、スペースシャトル・チャレンジャーの打ち上げ失敗のレポートも読みました。アメリカは原爆をつくり、海軍の所有する潜水艦や航空母艦にも原子力を使いました。ですから、平和利用に応用する時のエンジニアの主力は海軍の出身者です。そしてアトミック・エナジー・コミッション(AEC)をつくり、それが1970年代に、規制を行う原子力規制委員会(NRC)と、エネルギー省(DOE)の二つに分かれました。もちろん組織形態を変えたのは政治であり、世界が変わるとともに役所のシステムも変えているわけです。アメリカでそれをやって5年目にTMI事故が起こりました。件のケメニリーポートを見ると、これから規制委員会

は本当に独立してやっていかなければいけないということ、使う業者もいままでのようではダメだということを、かなり厳しく指摘しています。そしてわざわざ特別に「注意」と書いて、規制委員会と電力会社に強い要望を出しています。30年かけてお互いに独立させてきた。それだけのすごい苦労をしている。

一方、原子力産業のほうは原子力発電運転協会(INPO)をつくり、こちらもあり30年かけて、如何に透明で株主に責任ある形にしていくな、苦労しながらやってきました。初期にはビル・アダムスが、産業側ではすごくがんばった。その後にチェルノブイリ事故が起こりましたが、これはソ連だから仕方ないのですが、事故後に世界原子力発電事業者協会(WANO)がつくられます。INPOとWANOのどちらにも東電をはじめとした日本の電力会社は会員です。ですから、彼らがどうやって企業として統治しているかは知っています。自分たちにとって都合の悪いことはやらない。そして、日本の当局のあり方も世界はみんな知っていたということです。

政治も自民党のほぼ独占だったし、電力も独占という日本の特質は、世界に伝わっています。そういう社会では保身が先になってしまう。

北岡 「これは拙い」と言って、職を賭して抵抗するという話は最近聞いたことがありません。

黒川 「異論、異議を唱える義務」という極めて重要な組織統治の原則が日本人には欠けています。事故調報告書を書く時、中根千枝さん(社会人類学者)の本も読んだけど、日本人は例えば、学校を卒業して会社に入ると一生そこに居るものだと思っています。仕事場と自分の個性が深く心の中でつながっているのは何故でしょうか。それが中根千枝さんの言う日本社会に特異な「タテ社会」です。戦後は、西洋発のものを改善改良して安くつくればという産業構造で、これが日本人の「タテ社会」精神に合い、非常に都合が良かったのです。

——これから再稼働させるにしても、原子力の場合、「合意形成」という話が出てきます。そのためにどうしたらいいですか。

北岡 熟議型の決定とかいろいろとやりましたけれど、わたしはちょっと冷やかです。感情の集計をしても、あまり意味がないと思います。むしろわたしたちが聞きたいのは、世界中の専門家による徹底した議論です。

日本でよく使われる言葉の一つとして「安心・安全」があります。わたしは



▲エネルギー問題に対して、政治はもっと強いリーダーシップを示すべきではないか

「安全」はすごく大事だと思いますが、「安全」に100%はないのですから、どれだけ100%に近づけるか、コストも考えた上で徹底した議論をしてほしいと思います。

しかし、「安心」という言葉が日本にはびこっていることには、非常に違和感があります。「安心」は気持ちの問題です。どう言われても安心出来ないと言われたら、説得のしようがない。また「安心」していて

も、実はそれが嘘かもしれません。「安心」を訳す適当な英語がありません。強いて言えば、観点を変えてtrustでしようか。今回の事故でtrustが崩壊してしまったわけですが、どうやって再びtrustをつくるかと言えば、それは専門家の徹底した吟味しかないはずです。本当の専門家は、「ここから先は分からない」ということを言います。

いい加減な専門家ほど「これで大丈夫です」と言うものです。

◆これからの日本と原子力

——参院選が7月21日に行われ、その前の18日に新規制基準が施行されます。参院選後、原子力の問題をどう進めていくのが好ましいと思われるますか。

北岡 当面は原発が必要かもしれないけど、もう2年3ヶ月も経っているのですから、その間にいろいろと制度面でやらなくてはいいけないことが、いっぱいあったと思うんです。それを国

はしていない。結局、役人も風向きを見ていただけだから、「こんなことで安全なのか？」と言われると、非科学的に安全係数を上げるだけです。

先ほど申し上げた核セキュリティサミット有識者会議は2012年にも開かれましたが、そこでわたしは、「福島事故後、日本は非常に理性的に行動したといつて世界中が誉めてくれたが、パニックはあった」ことを話しました。例えばとして、健康に関してあまり科学的ではない情報に振り回されることが随分とあったことを紹介しました。そして、この際日本は放射能でどういう危険があり、どの程度までは安全なのか、信頼出来るグローバルスタンダードをつくるべきではないか、ということをつたつたのですが、いまもってそれもやっていません。

黒川 北岡先生のおっしゃるとおりです。原子力事故にさらされて、中長期的にどういう被害があるか分からない。放射能の被害の最初のデータは広島と長崎ですよ。それはアメリカが始めてフォローしているから、今でも続いている。日本では予算がなくなったら止めますが、日本の政策はそういうものだと思います。だけど、これのフォローをすることは世界の共有する資産になるのだから、政府の対応を福島の人達も世界の

人達も見ているのです。

こういう事故は誰だって起こしたくない。起きてしまった以上は、いろんな世界の人達のアドバイスを取り入れながら、政策のプロセスと決定を透明にすべきです。それについては世界に、次の世代の人たちに、事故にならないようにするにはどうしたらいいか。事故が起きたらどう対応するのか。自分たちはベストを尽くすけれど、ファクトとしては世界と共有していかなくてはいけないのです。しかも、それは関係者だけが知るのではなくて、公開しなくてはいいけない。

北岡 日本のスポーツで、外国人監督を連れてくるようになり、それで成績が上がっています。言葉のハンディはあるわけですが、総合把握をしてやっていく人を入れればいいと思います。役所の重要なポストにも外国人を入れればいいと思う。大学で外国人を学長にすることだって出来ます。

日本の悪いところの根っ子にあるのは、わたしは「嫉妬」だと思います。みんなが「嫉妬」で足を引っ張って、おかしい平等主義にして、あるべき能力をのびのびと活かさない。わたしはそれが一番残念です。みんな割合としつかりして行動するから、リーダーが無能でも務まる。日本はタテ社会で、同じ組織にずっと居るのですが、割合と横

歩きをしているのは女の子です。これから女性に期待しましょう。

黒川 そうですね。20世紀後半のパラダイムですが、女性をどれだけ活用出来るかという、各国のインデックスが出てきて、去年ではデータがとれる135カ国のうち日本は101番。つまり、女性は参政権があり、高等教育も男と同じように受けているけれど、参加出来ない。米国アイビーリーグ大学8校のうち4校で学長は女性です。あのゼロックスの経営を立て直したのも女性社長です。その後継者は黒人の女性です。そして彼女たちはMBAを持っているわけでもない、ずっと「OL」さんをやっていた。要するに、能力でポストが決まる制度です。

日本の主要大学の学部生に占める女性の割合で、東大は20%を超えない、最低なのです。合格率は男女で同じなのに何故なのか。皆さんが知っている世界の一流大学の学部学生は男女ほぼ同数です。そのように努力しているのです。

北岡 女の子が行ける受験校が少ないというところもあるのですか。女性は組織に対する忠誠心が、これは伝統なのか、カルチャーなのか、薄いのです。だから嫌になったらすぐに辞めます。そういう人が組織を発展させます。

黒川 ゴールドマンサックスの分析によると、女性の活用をヨーロッパ並みにすれば、日本のGDPは10〜15%増えるということですよ。

北岡 わたしは人間の能力は鍛えれば、かなり伸びると思っています。だから役所でも入って最初の10年くらいは、よくやっているとします。役所の場合、年齢に不釣り合いな大きな仕事を任せられるので伸びるのだと思います。ところがそこから先がダメなんです。

わたしは若手の研究者に、チマチマチ論文を書くな、大きなテーマに取り組んでみると言っています。期限内に論文が書けるかどうか分からないので、リスクですよ。大きな課題はすぐには答えが出ないし、それでも格闘することで成長するのです。わたしは人間として折角持つて生まれた能力を開花させないというのは、教育者として非常に残念です。

黒川 今日の二人のモノの見方は、直感的に「世界から見た日本」を感じとっている、というところに根本がありますね。みなさん口では「それはそうです」と言うけれど、外で独立した個人として、あるキャリアを積んでいない限り、なかなか分からない。それは実を言うと「愛国心」、外から見える日

本に対する懸念です。日本のことが気になるから、ひどいなと思っている。

北岡 しょっちゅうでは困りますが、10年に一度くらいは政権交代があったほうがいい。政党間の競争がない限り、問題を解決しようとは思いません。抵抗勢力というか。問題解決能力を失わせるのは独占でしょう。

政治家にもよく勉強している人もいますが、もつと良質なディベートに晒される必要があると思います。一言突けば崩れるような脆い議論を、平気で言う人がいます。

少なくとも学者の中で優秀な人はそんなこととは言いません。あらゆる方向から批判が飛んできた時、何時でもディフェンドできるように議論をつくるからです。それでかつ、イノベティブなことを言わなくては意味がない。言論空間がオープンではないし、本当の批判に晒されていないということが、大きいと思います。

黒川 「賢者は歴史に学ぶ」と言います。でも学ぼうという強い動機がない限り無理です。それは心の内に目があるのか、いつ、なぜ気付くのか、モチベーションですね。

いま多くの人が明治維新を懐かしがりますが、本質的に大切なことを学んでいるとは思えません。明治維新は本当の大改革ですが、明治9年の「秩禄処分」はすごい

なと思います。あれは薩長の下級武士による反乱ですから、武士としての扶を持っていたわけ。それを「一切なし」とした。それで反乱が起きて、最後は西南戦争です。

あれは大久保と西郷の出来レースだったのかもしれない。西郷は反乱して負けて大久保も暗殺される。それで初めて日本はゼロのスタートからがんばれたのです。例えば、いまの時代に「役所の利権は一切なし」「高い退職金もなし」とやれるかどうか、その覚悟があるかどうかです。

北岡 廃藩置県って、本当にすごいことです。薩長のリーダーが普通のリーダーなら、薩摩や長州の藩の勢力を維持しようと思いますよ。それを廃止してしまうのだからすごい決断です。それに比べれば、霞ヶ関の省庁の一つや二つ潰すくらい何てことはないだろうと思います。

ただしあの頃はテロもクーデターもあつたけれど、いまそれはタブーだから、それなしにテロやクーデターに近いことを政治の世界でやらなくてはいけないのですが、おっしゃるようなそんな覚悟があるのでしょうか。それだけの覚悟もなくて明治維新を懐かしがったところでしょうがない。

——ありがとうございます。